

BROADCASTING CREATOR'S ASSOCIATION

放送人の会

NO・16
2003・7・20
発行

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階
Tel & fax 03-3221-0019 E mail info@hosojin.com
代表幹事 大山 勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

2003放送人グランプリ贈賞式



(岡崎栄氏は当日撮影の仕事中にて欠席)

2003放送人グランプリ

「北の国から」P杉田成道氏とスタッフへ

グランプリ

杉田成道氏と「北の国から」制作スタッフ

(フジテレビ)

テレビドラマ「北の国から」に全スタッフが長年にわたって情熱を結集させ、傑出した成果を生み出し、とくに2002年の「遺言」が高い完成度で多くの仄ひとに感銘を与えたことに対し。

特別賞

村上 雅通(熊本放送)

2002年「水俣病 空白の病像」など長年にわたる水俣報道とドキュメンタリー、旅役者一座を軸にしたユニークな地域バラエティ番組の制作など、幅広く精力的な活動に対して。

岡崎 栄(フリー演出家)

ドラマ・ドキュメンタリー、情報番組など、つねに新しい表現に挑戦を試み続け、50年にわたって継続的に社会的な問いかけを茶の間に突きつけている制作姿勢に対して。

石高 健次(朝日放送)

北朝鮮帰国者のその後の取材を重ね、拉致問題の事実をはじめ報道するなど、2002年最大のニュースの糸口を切り開いた先駆的で地道な努力とジャーナリスト魂に対して。

受賞者のことば



杉田 成道

光陰矢のごとく、一枚一枚の画を追っかけて行くうちに、あっという間の21年でした。その間、スタッフにもさまざまな人生がありました。誕生あり、病あり、死あり、平凡といえる人生など何処にもない、と実感した時間でした。

仕事とは人のつながり、とは当たり前のことですが、私たちの仕事には、果たして暖かいつながりといったものは存在するのだろうか、とふと思うことがあります。

それぞれが衣を脱ぎ捨て、赤裸々に、ぶつかり、痛み、人を傷つけ、己を責め、絶望的状况の中から、なお、とにかく作るしかない、という意思が生まれること。その意思の総和が作品を作ること。

勿論、ドラマとは葛藤を表現するものですが、裏にある、関わる人間すべての現実の葛藤が、その膨大な総量が、一枚の面に凝縮されていく。登場人物の悩み苦しみの裏には、

支える人間たちの、性質は違いますが、同じほど深い、悩みがあり、苦しみがある。それが拡散することなく、一瞬に凝縮されたとき、言葉を越えたエネルギーが生まれる。台詞に命を吹き込むとは、そういうことなのだと思ひました。



村上 雅通

「放送人グランプリ」特別賞に加えて「放送文化基金賞、個人グループ部門」での表彰を受け、只々恐縮するばかりです。というのも、受賞理由に挙げられた「水俣病報道」に余りにも未消化な部分が多いという思いが強いです。通常、取材を進めれば進める程、素材の輪郭が見えてくるものですが、水俣病はその逆で、取材量に比例するかのようにはわからないことが増大していくのです。私にとって水俣病は複雑怪奇なテーマであり、まさに五里霧中の状態なのです。最新作「水俣病 空白の病像」では組織と時代の歯車に組み込まれていく人間の姿までは描く

ことができましたが、何故組み込まれてしまったかという心情まで踏み込むことはできませんでした。これまでの五作品にも課題が残ったのですが、未だに解決できていません。今回の二つの受賞はそんな私に対する叱咤激励と受け止め、改めて自らのスタンスを確認しているところで、興味を抱き、感動し、疑問を解決していくという番組作りの基本を肝に銘じて、これからも水俣を見つめていくつもりです。その積み重ねが霧を取り除く原動力になると信じて。がんばります。



岡崎 栄

今まで、いくつかの賞をいただきましたが（今年はいもう一つ放送文化基金賞なんてのも貰いました）、今回は、なにかとても温かい気持ちでフワカしています。変な言い方ですがみません。

何だろうと思いましたが、で、気がついたのは、同業者からの賞だったということ。

こういう賞、初めてなんです。同じ仕事をしている仲間から褒めてもらうって、こんなに嬉しいんですね。去年の石橋冠ちゃん、第一回なんです。

から、きつと、もっと嬉しかったんだろうなんて、かなり妬み心を一杯にして想像しています。その一方で、見る、50年もこの仕事をやってなきや、こんな賞貰えねえんだぞ、なんて威張って（小声で）胸張ったりして。

でも、授賞式に出席できなくて、本当にすみませんでした。代わって受けていただいた今野さん、ありがとうございました。

そのあとは「賞状とトロフィー、事務所にあるから、とりにきて」と、催促される始末で。

とにかく忙しいんで、そのうち、きつととりに行きます。生きているうちに、いや、生きていたら。



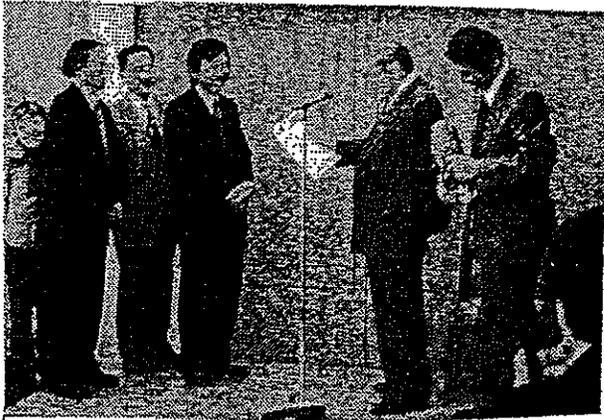
石高 健次

私の姿、形をしつかり見てくださって、こんな奴だということ下さった賞だと思えます。大先輩に祝っていたらだいたい本当に有難うございます。

昨年九月キムジョンイルが認めて謝罪しましたが、拉致ということがあるとわかって取材を始めたのではなく、大きな偶然、大きな出会いが重なってここまで来たのです。偶然

2003 放送人グランプリ 表彰式

川口名誉顧問



「長年にわたりご苦労様でした。純くん、当ちゃんにもよろしく」

の不思議さ、出会いの面白さを改めて感じています。
十二年前、核開発疑惑のとき、当時はサンデープロジェクトという番組のスタッフで取材に行きましたが、ある日北朝鮮に永住帰国した十万人の中の一人で韓国に亡命した人（永住帰国者のうち数千名が行方不明だと聞きました。これを追いつ、九十二年放送でも活字でも発表しました。初めての報道でしたが、その過程で一人の在日の女性に会い、お兄さんがピョンヤンで銃殺されたのは自分が北朝鮮のスパイと同棲して

いたからだ、そのスパイは大阪でコックになりすまし拉致をしている、という話でした。そのときはそんな話は信じられない状況で韓国の反キム（のデッチアゲと疑いました。取材を続けるうち拉致の実行犯の一人が韓国で捕まって釈放されていました。九十八年、その人にインタビューするとその人は路上で号泣して被害者の名前をあきらかにし、「××さんには本当に気の毒なことをした」と謝罪しました。このとき本当に拉致はあったのだと確信しました。それから横田めぐみさんの情報を掴み、

ご両親にピョンヤンで生きている可能性があることを伝えることができました。それまでは「嘘だ」「そんなことあるわけがない」と言われ、社内でも孤立していたのですが、横田さんが出てこられてから社会的な関心が高まって大きな動きになりました。いろんな偶然の出会いがあって、ある世界へ入って行く。またちよつと横を向くと別の世界があるそんな面白さ、重さを感じています。まだまだ年季が足りません。やりたいことは沢山あります。あと二十年、三十年やりたいと思います。



堀川とんこうさんより村上雅通さんへ



山崎裕さんより石高健次さんへ



今野勉「岡崎さんはキールの世話に忙殺中なので---かわりに」

第6回 名作の舞台裏 (7月6日)

「必殺仕置人」

必殺シリーズ (72〜87年 全74本)

は、白塗り東映時代劇とは全く違う明と暗のコントラスト、闇社会の人間模様にもみる集団劇、縦のパスベクタイプによる画面構成など、テレビ時代劇に一石を投じた名シリーズ。その第二シリーズ「仕置人 第一話 命を売ってさらし首」を上映後、荻野慶人さん司会で展開。

仕掛け人、山内久司さんが大阪からかけつけシリーズ成立の事情を、また芥川隆行の冒頭の名台詞(晴らせぬ怨み晴らします。鍼で一刺し地獄へおくる...ただしこの稼業江戸職業づくしにはない)の数々を楽しんで作ったと早坂暁さん。裏番組「木枯し紋次郎」の中村敦夫さん(後にシリーズにも出演)、中村圭水の奥方りつ役白木万里さんの豪華メンバーで進行。消防法規制すれすれの満員客席をみて「舞台裏」もすっかり定着したとの感あり。年配者だけでなくメディア関連の学生が目立った。

「ゲストの関係者がふともらす名言集やエピソードを是非おこしたい」(石橋冠さん)。その模様は収録してあるのでいずれ会報企画にします。

(編集部)

第6回総会・青山荘で開催

2003年度、第6回総会は五月十日(土)NHK青山荘(営団地下鉄表参道駅近く)1階大ホール棟の間で開催。川口名誉会長、大山代表幹事の挨拶のあと、2002年度活動報告、会計報告、2003年度活動方針、予算案を承認した。2002年度決算と2003年度予算については、左表をご覧ください。

会則の一部変更については、会計年度を「毎年四月一日から翌年三月三十一日までとする」とし、総会の成立条件の「会員現在数の2分の1の出席」の部分を削除、会則の変更の条件の「幹事および会員の3分の2以上」の部分の削除、を決定した。この後、放送人グランプリの贈賞式、懇親会が行われ、会は楽しい雰囲気であった。

2002年度会計報告

前年度繰越金	3,433,720
2002年度収入	5,182,955
2002年度支出	5,112,942
次年度繰越金	3,503,733

2003年度予算

収入	9,303,733
支出	
一般管理費	3,458,000
人件費	1,100,000
事務所費	378,000
通信交通費	500,000
会議費	300,000
印刷費	500,000
各種謝金	150,000
ウェブサイト管理費	380,000
事務用品費	100,000
雑費	50,000
事業費	
研究・名作の舞台裏	1,400,000
シンポジウム	500,000
放送人の証言	700,000
放送人グランプリ	300,000
放送論研究会	150,000
ラジオ・プロジェクト	150,000
予備費	200,000
次年度繰越金	1,945,733

新入会員紹介

鈴木道明・TBS、演出部、審議室作曲家、マスターズ水泳記録保持者
原田庸之助・電通、テレパック。「剣」
「木枯らし紋次郎」
森川時久・フリー、映画監督「元C X
国枝忠雄・CBC、役員
佐藤年・CBC、ラジオ演出
外崎宏司・テレビ朝日、WOWOW
番組制作、メディア開発。「木島則夫
モーニングショー」「土曜ワイド劇場」
三村千鶴・中国放送、ラジオ制作部。
「ヒロシマの黒い十字架」「潮騒の彼
方から」「イキジャ」「篠笛」
藤久ミネ・朝日放送、ラジオ制作部。
テレビ朝日ニュースキャスター。「お
くま囃歌」「私のキリスト」
下川晴夫・テレビ朝日制作部、青森
放送役員、テレビ朝日映像。
高橋啓・TBS、演出部、「兼高かお
る世界の旅」
合川明・NHK
吉村直樹・ラジオ大阪制作報道部。
「手紙」「目覚めよ！静かなる正義」
岸田功・日本テレビ、制作部。「テレ
ボール」「木島則夫ハブニングショー」
武谷雅博・TBS、制作技術、技術
開発、経営企画
宇野昭・NTV、TBS、テレビ高
知。放送運行、報道。
斎藤守慶・MBS役員。
磯村健二・テレビ朝日、音楽番組。「題
名のない音楽会」「親の目の目」
児玉久男・山梨放送、ラジオ制作。「歌
のない歌謡曲」
中田美知子・FM北海道東京支社長

放送界多頻語字典 畜魔書房刊

ホン：台本のことと書籍ではない。業界では自衛的に使う。ホンヤさん(放送作家)だってホンではない。本を書きたい、これがホンヤだ。いつかは是非出さんと思ふ本のこと。表紙のことなど妻に語れる(塚木)マイフン：新聞ラ・テ欄は毎週木曜日にベスト20のランキングを発表。勝った負けたと唯すが業界はちがう。調査部では毎分刻みの数字を読み込み、マイフンとドラマの推移と裏番組の相関でクールに分析・判断する。友情出演：ゲストスターの箔をつける名称。または人気役者のギャラを値切る場合や落ち目だが何かとウルサイ老優を奉る使用法。別件では業界筋出版パーティーに名前だけ貸すが欠席する義理がけのこと。ウラマル：ワインバーの大テール。ブルなどで出揃った業界美女連にかこまれたプロダクション社長「今夜はウラマルで行きましょう」などと「はなまるマーケット」の薬丸裕英気取りでリードする御仁のこと。乾杯オジサン：昔、日経・審査委員長をつとめたレコ大のボス平井某の別名。今は、紫綬褒章にもれた業界最長老のためのパーティー人事。表向きは洪々だがニ満更でもない？再現役者：再現ドラマしか出演しない無名役者のこと。演技が話題になり有名になってしまおうリアルさがないとクビ?!無情である。(高嶋蝶)

北南馬船

チエコ動乱からの旅・旅

合川 明

昭和四十三年、「チエコ動乱」勃発二日目に、吉成特派員とワルシャワから首都プラハに入る。血の広場、ソ連戦車の上では花束かざした若者達が国歌を合唱している。国営放送局長に「出て行け」とピストルを突き付けられた。同じソ連の被圧制下にあるポーランドの軍隊が、チエコ革命の鎮圧のために、ソ連の第一尖兵として国境からまっさきになだれこんで来たこと、その首都ワルシャワからノコノコとやってきた、私への憎悪からでした。

これより少し前、「源義経」と「文吾捕物絵図」を終えて、「ワルシャワの秋」現代音楽祭に招かれていて、およそ私にはなじめないジョンケージやパトコフスキーの作品、盗聴と監視にも悩まされた四十日でしたが、そんな中で、いじらしくも健気に生きていくこの国に惚れて、この五月、三度目の旅でした。

知人の車で、十字軍の城、コペル

ニクスの街、港都グダンスクは「連帯」発祥の地、親王ワレサは身内の汚職で、今や落ちた偶像。

古都クラコフ、アンジエイ、ワイダ館長の日本館と教会。連夜、名酒ズプロツカで乾杯。アウシエヴィツツでは、又寒気に吐く。アランレネや草柳さんの名作を思ふ。

ドイツへの二等寝台車は、英国のヒッピーと、ペチャペチャとはだして歩き廻る不気味なオランダ女、今も尚きびしい両国の軍隊の深夜の臨検に眠れず。東ベルリン駅の朝は親切な青年に救われた。

前回は東野英治郎さんの紹介で国賓待遇、憲兵二人に挟まれてベルリナーナアンサンブルの特等席でした。機能的な小道具の出し入れ、舞台せましと疾駆するオートバイ、ピタリとさめるカブキ風のプレヒト演出と、その興行版図の広さに驚嘆したもの。

ヒットラーの野望の象徴、エジプト博と、大ベルガモンに疲れて、今回は使いたくないライカ屋と文具店、チマチマと鉛筆、消しゴム、削り器、買い漁る。我が札中は色鮮やかなイタリヤ物とのせめぎ合いで、孫娘の好餌です。

塔都ケルンで、ナポレオンの香水、南都デュッセルドルフの朝は、つぐみ横丁、のセラードニシンと大ジョッキ、霧のライン河沿いに猛犬ひき連れたモヒカン刈りの若者達が、肅々と行進してくる。ネオナチの「ユーゲンツ」(青年行動隊)のお通りだしい。白前垂れのパーテンも、老夫

婦達も、一同黙視して話らない。豪華一等人旅でした。

もどつて映画、ポーランドが誇るポランスキー、今度はケレンなしの「ピアニスト・シュビルマン」。おお、まだ生きていたかの超粘力のドイツの巨匠ヘルツォークの「無敵の男」を見る。昭和初期のベルリンとワルシャワ、ナチス台頭のまがまがしさと、ロブローイの怪演に酔う。「シカゴ」もごひいきパチーノ、ニコルソンも老いて益々魅力的。

鉄砲に守られた放送局と、どつちがいいかは自明のことだが、テレビ局のおふニヤケ番組の多さに閉口して、専らCSのグリーンと将棋チャネルに凝っている。

それでも、キレと気合のマンガチック、銭道やぐくせん、ダイヤモンドありさ、の美形とまいどの好フアッシュン、無印ながらの優れものでした。我が大河「武蔵」、薄力粉風で心配。再来年は「義経」とか、その菊之助義経、弱冠六十歳で人間国宝。めでたい。

ただ梨園ではあんなに国宝多数なのに、我が園、杉村、山田、森繁、映画、演劇、放送界には、官尊民卑、最もイヤな言葉。

五社英雄さんと熱戦した麻雀道は、月一回。老兵共と温泉二泊旅。北品川の「翁」でひる酒喰らって、六十年、深情けの弱小球団の外野で、夜のラッパをききながら冷めてカンチューハイ握り潰している。もうその死までの、ふやけたお

好み、快樂旅行です。

イラク戦争報道論

藤久 ミネ

いま、『AURA』や『新・調査情報』『月刊民放』さらには『総合ジャーナリズム研究』や『創』などの各誌がいつせいにイラク戦争特集を組んでいて、それぞれに読みごたえがある。なかでも野中章弘、綿井健陽、宮嶋茂樹らフリーランスのジャーナリスト諸氏の渦中での取材体験に裏付けられた戦争報道論と、メディアのあり方についての意見を興味深く読んだ。

情報だけでなくメディア自体が政治に取り込まれ、戦略の一部として操作対象になりつつある。日米のメディアのある部分には、その気配が濃厚に見える。

そういうなかで英国BBCのジャーナリズムとしての健在ぶりが見事だ。元デイリー・ミラー紙の敏腕記者だったというキャンベル報道・戦略局長を「虚報」の仕掛け人と名ざし、議会の外交委員会でBBC記者がそれを証言した。「命令後、45分以内でイラク軍は生物・化学兵器を使用できる」という虚報が報道されたこと、イラク戦争の引き金になったという告発だ。

報道が事件をつくる。傾向は、近頃ますます顕著である。報道者の

状況を読む目の大切さと、イラク戦争を、旧聞にしなない英国社会の強靱さにも敬意を表したい。

東京行きを希望した理由

中田美知子

今年花見をしなかった。桜を待ちわびる札幌を離れ、桜の終わった東京に転勤したからである。昨春秋自分の番組が目先のことばかりを追い続ける半徑50mの話題で終始していることに気づいた。ある朝目が醒めて「番組継続10年で来春やめよう」と心に決めた。贅沢な話である。フリーランスで仕事をしていた時はいつも終わる話は先方からやってくる。すまなさそうに番組のプロデューサーが次の改編で番組が終了することを告げていたものである。なのに今回は降板を自分で決めた。一旦決めたら振り返らずに闇雲に走った。リスナーには「私の行き方を見てください」と言って振り切つて東京勤務を希望した。自分がまだ出演出来る環境にいたら思いが残りそうだったから。

今の日本は皆が自信をなくしている。営業現場の男が言った。「新聞2年、ラジオは4年、テレビは10年で終わる」と。それを聞いて広告一筋の新聞社の人が笑って言った。「私が入社した40年前にも新聞は10年持たないと言われたよ」

免許事業に胡座をかくつもりは毛頭ない。時代の流れのなかでラジオの何が変わって、何が変わってはいないのか。それが、それだけが知りたくて私は東京へ来た。

(FM北海道・東京支社長)

不思議にも出会って

下川 靖夫

平成6年3月10日の日本経済新聞最終ページの文化欄をみて驚いた。それは当時JRR東日本社長であった松田昌士氏な書かれたもので、そこに私の祖父と父の名が書かれてあった。祖父、父共に名もなき鉄道員で、当時既に故人であった。内容はこうだ。松田社長がサハリ鉄道の民営化支援に訪問した際、かつての樺太鉄道員のアルバムをプレゼントされたのである。発行は昭和7年で三百枚を超えるスナップを集めた写真集で、当時の樺太鉄道とそこで働く人々の様子を伝える貴重な資料だという。野田駅長大久保伊三男氏、助役武石秀繁氏、大谷保線丁場下川佐太郎氏、組頭土屋七之助氏。更に、そこにはアルバムにある一枚の写真が載っている。6人の鉄道員が写っているが名前は書かれていない。「北豊原保線丁場」と説明がある。「野田駅」でも「大谷保線丁場」でもない。いうまでもなく、佐太郎は父であり、土屋七之助は祖父である。一枚の写

真に5、6人写っていると千五百人以上の人々のなかで名前が判っているのは4人だけなのか？それとも、全て記名されている中から父と祖父の名が無作為に抽出されたのか？アルバムを是非見たいと思った。松田氏は写真集に収録されている人たちの消息を調べるといふ大きな仕事も残っている、と記してある。さっそくJRR東日本の広報に連絡した。父は昭和37年に札幌鉄道管理局を定年退職したこと、すでに他界したことと述べ、合わせてアルバムが欲しいと申し出た。約1ヵ月後、紙にコピーしたアルバムが届いた。アルバムの人々の名はほとんど記されていた。7月初旬、青森朝日放送に在職していた私に、ロシア極東ツアーお誘いがあった。不思議なめぐり合わせと喜んで参加した。ハバロフスク、ウラジオストク、イルクーツクと回り、最後にサハリン(樺太)のユジノサハリンスク(豊原)に着した。豊原は佐太郎一家が終戦を迎えた地であり、樺太における国鉄最後の地である。20年8月、私は豊原第三小学校の2年生であった。鉄道官舎の風景はなく、父の育った「大谷」の実家は草原となり、母の生まれた「大泊」の実家の所在地すら判らなかつた。偶然目にした記事から広がり出した波紋。早く他界したため初めて出会った祖父と27歳の若き父、それから出来事、驚きと感慨。アルバムに生きている父に導かれる様に訪れた出生地への旅。父は何を

伝えたくて私を誘ったのだろう。

ウイルス騒動

伊藤 雅浩

私のパソコンがウイルスに感染し、メールの送信記録に残っているアドレス全部にウイルスに感染したメールが配信されてしまいました。

ウイルスは、メールの発信者の欄に見慣れた知り合いのメールアドレスが書いてあり、メッセージは空欄で、添付ファイルにもつともらしい名前がついています。この添付ファイルを開こうとすると開かず、たちまちウイルスに感染してしまいます。ウイルスはほとんどメールでウイルスを送信しますので、パソコンの処理速度は極端に遅くなり、場合によってはマウスが全く動かなくなります。このウイルスはいろんなルートを通じて会員の中のだなたかに届いているかも知れません。本当に多くの方にご迷惑をかけました。この紙面を借りてお詫びする次第です。

今回私は被害者であると同時に加害者になり、怒りと申し訳なさと情けなさいないままになつたなとも言えない気分を味わいました。中国のSARS関係者の気分が少しわかつたような気がします。「マスクをかけていなくなつたからSARSに感染した」と非難されなければならぬのか」と聞き直れない悔しさ、情けなさを判って頂けるでしょうか？

リレー放送現場史

放送人の自由の喪失がはじま
ていないか

重延 浩

2003年5月、私はロシアのサンクトペテルブルクで、その町が建都300年を迎えようとする時を見つめていた。その郊外にあるエカテリーナ宮殿は、ロマノフ王朝の夏の離宮だった。その宮殿をナチスドイツは占領した。1941年9月のことである。その宮殿への攻撃が始まったのは、9月4日と聞いて、私は不思議な感慨を持った。その日は私が樺太で産声を上げた日だった。そうか、そんな日にロシアはこの地で悲惨な戦火の攻撃を受け始めたのか。レニングラード（サンクトペテルブルク）はそれから900日、ナチスドイツに包囲され、60万人の死者をだす。

私は、一人のテレビディレクターとして、エカテリーナ宮殿の「琥珀の間」の物語をNHKの番組として、制作していた。琥珀の間は世界でただひとつの琥珀だけでできた部屋である。1716年プロイセン、今のドイツからロシアに贈られ、1770年、エカテリーナII世により、このエカテリーナ宮殿で完成した。皇帝たちが愛用したこの琥珀の間を、侵略したナチスドイツが略奪する。

1941年、琥珀の間はドイツ軍により、ドイツ東部の港町ケーニヒスベルクに運ばれた。そのケーニヒスベルクは、1944年夏から連合軍の攻撃を受け、琥珀の間を保管していた城は炎上した。1945年5月、ソ連軍がこの町に進攻したとき、琥珀の間は無かった。燃えてしまったとドイツ側は報告した。しかし、エカテリーナ宮殿は信じなかった。どこかに隠したのではないか。その疑問は今も消えていない。この物語は、戦争がいかに文化的犯罪を犯すかを糾弾するものとしたかった。それは現代にも続く主題を持っている。イラクはその博物館から、多くの美術品を失った。文化遺産の喪失は、人命の喪失に次ぐ、現代の戦争犯罪である。

私は、樺太で生まれ、戦争で故郷を失った者として、終生戦争を語る宿命を持つているように考える。それを直接的な表現でなく、何かを通して、自然に訴えたいという演出論を持つ。

1989年、ベルリンの壁が崩壊したとき、私はベルリンにいらることを、放送人の自分なりの課題としていた。一つの企画を持って、NHKを訪ねた。「ベルリン美術館」という企画である。ヒトラーが台頭して以来、ベルリン美術館の悲劇が始まった。退廃芸術の排除というナチスの芸術政策、戦火を避けた美術品の疎開、戦争による焼失、破壊、盗難。戦後東西に分けられた美術品。東の

ベルリン美術館と西のベルリン美術館に分断された。その美術館をドイツ統一前に、テレビジョンで統一させるという企画だった。その企画には、個人の反戦の理念もこめられたのだ。当時NHKは、番組を本格的に外部制作会社に委託することは無かった。だから私は、その企画が許されるものでないと思った。しかし、NHKの対応は、まったく私の予想に反するものだった。その企画は、合意された。私は、公共放送の新しい理念に思えた。多様な放送内容を迎え入れるという放送法に則った、勇気ある決断だったと思う。何を放送すべきか、それをそれまでの既製の判断より優先させたのである。私はその自由さに感謝し、自由なる演出でNHKに心えた。

放送局が何を放送すべきかは、放送とは何かを考えることである。近年、放送局がその理念を全うしているとは思わない。何を放送すべきかを、視聴者がそう望んでいるという理由で、視聴率を優先している。私は視聴率を否定するものではないが、現在の放送内容の基準が、あるべき放送とは別のところへ向かっているように思う。一放送人としては何とか、自分の理念を全うしたいと考えているが、そうした自由な理念は、しだいに難しくなっている。報告せざるを得ない。理由を深くは語らない。自明のことだからである。では、次の企画をどこへ持っていけばよいのだろうか

御見立俳諧古選

蕪村 篇

・ぬげがけの浅瀬わたるや夏の月

(解)ぬげがけとスクープとは違ふ、とペテランのデスク、天狗心の部下を論ず心境か、さもありません。山々を低く覚ゆる青田かな

(解)研修の新人たちが群れ口々に、先輩何するものぞ。意気は善しされど青田の爽りも測りかねて

・お手討ちの夫婦なりしを更衣

(解)職場婚の元女子アナ老いて溜息つきて「アナ室長の忠告をふりきり結婚したけど、ダメ男だったわ。古着はもうイヤ。夏物バーゲンのヤケ買いしちゃうから」と悪妻の居直りを詠む、これが真意か

・こもり居て雨うたがふや蝸牛

(解)外勤がニガ手のデスク殿が机にへばりつき、評論家気取りでキャスターの言説をあげつらうさま。好きな雨の気配も気づかぬハポデスク

・雨乞いに曇る園司のなみだ哉

(解)神仏、下降気味の視聴率頼みます。悪しければ、おのが首危ふしとオロオロ声の重役諸公の本音を詠む。したが涙の問題なりしか

・なれ過ぎた鮎をあるじの遺恨哉

(注)あるじとはドラマ演出家遺恨とは悔しがるさまを言ふ

(解)役者のオーバーな演技でドラマが飽きた鮎のようにクサイものになったこと、反省しきりの感慨

蕪村独特なプレシオジテ(気取り)

(解)注釈・四谷亭馬笑)

ラジオドラマに賭けた先人たち

久野浩平

今回はラジオドラマに関わる「証言」をまとめてみました。

まず触れておきたいのは名作『この虫十万ドル』の作者ノーマン・カウインのラジオドラマ集が戦後の日本に初めて到着した経緯についてです。

戦後のラジオドラマ始めは西澤實さん、堀江史朗さんの「証言」で既に触れましたが、お二人に関係あるエピソードから入ることにしましょう。

お二人とも兵士として南方に歴戦し敗戦で捕虜生活を送るのですが、そこで米軍兵士用読み物(G・Iブック)に入っていた「ラジオドラマ集」を期せずして入手します。西澤さんはトラック島から、堀江さんはニューギニアから、それぞれに監視の目をくぐり持ち帰ってきたのがこの脚本集でした。

二つのコースをたどってノーマン・カウインがAKとBKに同時に紹介された偶然の事情を「証言」の重ね合わせで初めて知り、不思議な感動が走ったものでした。

「放送人の証言」収録は、一九九九年四月、BKの音響効果の大先輩辻好雄さんと作本秀信さんのお話を伺うことでスタートしました。擬音時代を経て、録音技術の開発、更にはシンセサイザーの登場に至る六十年におよぶ「音」の追及と創造の歴史です。

「そりゃ和田(精)さんの今まで持ったアレ、音響効果に対する愛がBKで花開いたんところがいますか。実験的にね、ま、自分の思う通りのものができるまで没頭し、ま、和田さんは音は作りものだという自信を持たれたのところがいますか」(辻さん)

「擬音というのは殆ど歌舞伎など演劇から輸入してますね。和田精さん以降です、効果音として放送独自のものを色々考えられたのは。効果音とはマイクフォンというものを意識されて考案されてますねん」(作本さん)

「和田さん語録にね、お前らの先輩は本来音のない雪を音で表現したやんか、頑張りなはれって」(作本さん) 和田精さんは一九三〇年代から戦後にかけてBKに在籍、後に民放ラジオ開局に際して後進の指導に当たりました。

一九五一年九月一日、民放ラジオの第一声を発したのは名古屋のCBC。開局を前に入社、六十年代ラジオドラマ全盛期の先駆的演出者の一人だった佐藤年さんの「証言」もあります。

「和田精さんが指導した毎日放送は既にいいドラマ作ってるんですよ、そこでわたしも修行しましてね(中略)彼らが作るラジオドラマをスタジオの隅っこでね、見てるわけですよ。その演出の一挙手一投足を」

「和田さんが言ったのは、ラジオドラマっていうのは最終的に還元されるのは音でしかない。だから、ぼくが音屋から演出家になったのはね、音の専門家だからできることだったんだと」

佐藤さんの「証言」はCBC、大阪のABC、福岡のRKB、北海道放送、東北放送の各東京支社による共同制作組織「四月会」の活発な仕事に触れてゆきます。

しばらくして文化放送もこの共同制作に参加することになります。同時代の文化放送の代表的ディレクターだった島地純さんの「証言」です。

「太平洋ひとりぼっち」「戦艦大和」などの名作を残した演出家ですが、島地さんの「証言」は同僚だった大坪都築さん(RKBから文化放送へ移籍)の思い出を多く語っています。

ラジオドラマの鬼才と呼ばれた大坪都築さんは、一九六三年、局の1スタで仕事中、心臓発作で急逝したのです。(註)急速な駆けつけ大坪さんの脈をとり、首を振ったのは安部公房さん。作家であり医師でもあった氏は、同時刻に隣りの2スタで録音構成「日本の地方都市」出演中。担当・吉村育夫、松尾羊一らの収録中のことでした。

「文化放送のラジオドラマをある意味で大きく変えたのは、ツボさんだと思えますね。それまではメロドラマであれ何であれ、作家がお芝居としてドラマにする。音楽や効果音を使い、俳優さんをかき集める。それがラジオドラマだった(中略)大坪くんは全く異質の発想をした男だった。つまりラジオとは音のイメージの世界なのだ、うん、そのイメージの世界をドラマの世界で縦横にふくらますわけね(中略)安倍公房作の『棒になった男』などはまず音が聞こえる。音に託された人間の孤

独感、そこから発想した最初の演出家だった」。

ここでもまた、「音の世界」が語られているのです。

最後にもう一人、佐藤さんや島地さんと同年代のNHKの代表的な演出家香西久さんの「証言」を得ました。

香西さん(一九五一年NHKに入局)が演出したドラマは一六〇〇本に達しました。香西さんもまた、音や科白の実験や職人的なこだわりについて熱心に語ります。

氏の「証言」は「新諸国物語」からステレオドラマに至るNHKラジオドラマ史そのものであり、徳川夢声、渋谷天外というような大長老俳優との交遊録は貴重な記録となりました。

定年退職後もフリーとしてFMをふくめ民放各局やカセット出版などで活躍中ですが、残念なことにラジオドラマの衰退でフリー演出の場合は数少なくなってきました。

でも香西さんは挫けず「流行の言葉で言うライブなんです、昔の公開放送みたいなの。お客さんを入れマイクを立て、俳優さんが台本を持ってやるという劇場形式によるライブ・ラジオドラマをやってみたりしました」

中野サンブラザの大ホールで手塚治虫の『火の鳥』を上演、『子午線の祀り』(木下順二)にヒントを得た群読のテクニクは好評でした。

和田精さん以来嘗々と追及されてきたラジオドラマの手法と技術の財産が、今また新しい形式で生命を獲得しているのは嬉しいことです。

生の徹夜討論番組

『ティーチン』

ばば、こうい

今はすっかりキーステーションとして自立したテレビ東京も、東京12チャンネルと名乗っていた開局二年目頃は、科学技術教育番組一辺倒の編成で軒並み「*印」ばかりの低視聴率、経営状態は青息吐息で監督官庁から大幅リストラを求められたとか、NHKに吸収されるのでは、といった噂が飛び交い、局内の空気は陰鬱そのものだった。

そんな中まさに八方破れに企画されたのが、戦後二十年目の終戦前夜に放送された長時間の生の討論番組『ティーチン』であった。

今とは違い午前零時を過ぎれば視聴者もほとんどなく、まして取材映像も使われぬ長時間のトーク番組企画などはテレビになる筈がない、というのが局内大方の空気だったが、折からの不況で経済界からは約束の補助金も反故にされ、編成方針は決まらず、相次ぐ低視聴率で営業成績最悪という状況がそうさせたのか、経済界から送り込まれた編成局長がベ平連の戦後総括シンポジウムを耳にして、編成課長だった私にテレビ番組にするよう命じたのであった。死中に活を求める必死の気持ちでそうさせたのだろう。

先行き不透明な不安感から局内では責任のなすり合いや派閥争いが絶えず、この時も提案者の局次長と事なかれ主義の編成局長は対立した。ベ平連のよ

うな怪しげな運動組織と組んでの生の討論番組などは危険きわまりない、問題が起これたらどうするのかと局長は反対する。対する局次長は冒険せずに活路ほひらけるか、と迫る。結局刺激的でない企画にして、かつ売れることが放送の条件という結論に落ち着き、後は私に番組プロデューサーの責任が委ねられた。

そこでまず穏やかな「表の企画書」＝波瀾万丈、テンションのある討論番組になりそうな広告主向けの「裏の企画書」を用意して、営業仲間の尻を叩いた。「裏の企画書」のために地味なシンポジウム企画だけでは、見てくれる人も少なからう、だから自民党から共産党まで元気のいい若手政治家たちを参加させるべきだと、お堅いベ平連をも説得した。更に予算が無いと深夜弁当を出し渋る総務の発言に頭にくいて協力しかねると言い出した組合には、実験番組も試みずに会社が潰れるのを待つのかと、委員長を膝ずめで口説いた。

営業の努力で広告主がついたのはいいが、数十人が出演する数時間の生の討論番組に出してくれただお金はしめて50万円、今では考えられぬ少額だったが、それでも民放番組としての体裁は整った。だが混乱はさらに続いた。

放送中止の噂を聞いたからと、当のベ平連から何があっても放送を止めないという公式文書を要求され、刻々と過ぎる時計の針を睨みながら、「放送法に違反することがない限り、放送中止はしない」と書いた私の名刺を手渡すことで、ようやく赤坂プリンス国際会議場からの徹夜討論会「戦争と平和を考える」の生中継が始まった。

第一部では後の首相になった中曽根康弘氏や宮沢喜一氏をはじめと野党の若手論客たちが戦後二十年を巡ってホッネで激しい討論を展開し、会場は怒号が渦巻いた。まさにそれまでテレビに馴染まないとされてきた討論番組の面白さと可能性を示唆する内容だった。番組のほとんどが視聴率*印の局であり、おまけに深夜の時間帯にも拘わらず、電話は鳴りっぱなし、局の副調整室でお目付け役の報道局長と一緒にモニターを見つけていた私も久しぶりの高揚感に浸っていた。

午後四時、激論の第一部が終わって、ベ平連に進行が任される第二部「戦争と戦後の総括」に入った。最初の問題提起が静かに始まった。その直後である。報道局長の「放送中止！」という声。「偏向発言だ！天皇の戦争責任、戦犯岸信介という言い方はまずい！放送中止、放送中止だ！」と彼は叫んだ。

容赦なく中継ラインが切られた。たちまち局内は大混乱。視聴者からの電話は殺到、スタッフは目を血走らせて右往左往する。ベ平連からの抗議はすさまじかった。番組の責任者として矢面に立たされた私は、第二部冒頭の発言が放送法違反に触れたからだど鸚鵡のように繰り返すしかなかった。

時を経ずして局次長は飛ばされ、私は戒告処分になった。番組の視聴率は平均4%を記録、当時の東京12チャンネルとしては媒体として注目を浴びる充分な数字だった。今後この局はトーク番組路線を取るべきだという代理店の幹部も居た。

だが実験的試みは局内ではことごとく封じられ、流れは翌年の大量リストラへとつながって行った。そんな会社の方針に課長の立場で反対した私は、局長から解雇を言い渡された。

以後この局が安定するまで紆余曲折、数年以上の冬の時代が続くのである。フリーになってからも放送で色々なことを試みた。成功もしたが、失敗も少なくなかった。当年七十歳になった今でも現場で番組作りを続けられるのは幸運というしかないが、新しい企画の話や聞くとついワクワクしてしまう。性は治らぬようだ。

番組作りはどんなに苦勞があっても気にならない。放送の世界に身を投じたことをつくづく幸せに思う。地上波以外にもBSあり、ブロードバンドありのメディアの戦国時代は面白くてたまらない。

何度失敗しても、他人の真似をせず挑戦する心意気だけは、死ぬ瞬間までわすれたくない、と思う。

(キャスター 文筆家)

『テレビ50年わたしの証言』欄のねらいは、いわゆる傑作、話題作ではなく、いろいろな社会的、業界的に話題と反響を呼び、渦中にあった現場当事者が語る裏面史です。以後のテレビ編成や制作に多くの示唆を与えた番組企画を掘り起こす、そんなねらいのコラム欄です。テレビ歴史ふうなエピソードをお持ちの会員の企画提案をお待ちしております。

(編集部)

ラジオの広場

放送人の会
ラジオ委員会
◆◆◆◆◆
=原稿 到着順=

わが、東京右往左往の弁

木村成忠 (東北放送東京支社長)

東京支社長を命じられ3ヶ月が経った。この3ヶ月間は27年間関わってきた制作現場の仕事から離れた時間でもある。番組企画に追いついて行けることもなく、若手制作マンに鞭を飛ばす必要もなくなった。

・・・その解放感と寂寥感。

目下家内を仙台に残しての単身赴任。単身となれば実は楽しみにしていたことがあった。『家庭と酒は読書の敵!』とはどなたかの本のタイトル。東京では家庭に煩わされることなく本を読む時間が増えるだろうと。しかし考えが甘かった。家庭の煩わしさから解放されたのに、在宅の時間は炊事、洗濯、掃除に時間をとられてしまい、ままならない。そして、やはりというべきか、もう一つの敵、東京の酒々の誘い。こちらはかなり手ごわいものだった。初めのうちは断る術を知らないまま全部引き受けていたらひと月間毎夜酒席の予定で埋まってしまった。つまり本も満足に読めない東京暮らしである。東京の生活で気になることがある。仙台では外にいても、どこからかラジオが聞こえてきていたものだ。タクシーの中、商店街、繁華街のラーメン屋で終日TBCラジオを流しているところがあるが何軒かあり、うれしい限り。東京

ではそれが無い。暮らしの中でラジオの存在が希薄のようである。先日乗ったタクシーもラジオのスイッチが入っていないだったので運転手にきいてみたすると会社の方針で、基本的にスイッチオフとのこと。客から要望があった場合にだけかけるのだと。以前はプロ野球の試合経過を知っておくことが接客の上で大切なことだったのに今年も某人気球団が絶不調のせい、スコアを尋ねる客もほとんどいないとか。

6月は全国民放ラジオで聴取率調査が実施されている。ライバル局に勝った、負けたと一喜一憂しているが、多くのリスナーに聴かれないことには意味はない。

ラ・テ兼管局員には珍しくテレビに関わったのは入社直後の2年半。あとはラジオ、殊に長年制作に携わってきた。この度、制作現場を離れることになったが、これからはラジオの制作・編成についても社の内外で発言・行動していきたい、と思ってる。

夢を届けるラジオ

三村千鶴

「なぜ活字じゃなくて、放送の仕事を選んだのですか」。授業の一環で放送局の職場見学に訪れた中学生の一人が質問してきた。

「音や映像にのせて夢を届けたかったから」と答えはしたものの、空虚感が残った。経費削減、合理化の波に晒されたこの五年。本当に夢を届ける仕事をしてきたのだろうか・・・

今春、高校教師をしながらライブ活動を続ける男性をパーソナリティに、「夢」をテーマにしたティーン・エイジャー向けの番組をスタートさせた。

いわば「出前」の発想で、ラジオから縁遠い層に直接働きかけようと街でストリート・ミュージシャンなどを取材する一方、相談コーナーを設けた。前後には軽快なトークの若者向け番組。そこだけ真面目になり過ぎないよう、と編成からクギをさされてのスタートだった。

初回の放送終了後、予想を上回る数のメールが寄せられた。「このパーソナリティの人、いいこと言うじゃんっ感じで聴いていました」「あきらめかけていた夢があったけど、もう一度頑張る気になりました」。

一見クールなティーンたちは、これまで一体誰に心の内を話していたのか。教師だけでなく、親でさえ子供と対話できないケースが増えている、とも聞く。ならば、番組が心の交流の場になり得るかもしれない。

今、夢を電波にのせて届けるとはどいうことなのか、それを示してくれたのは、まぎれもなくリスナーだった。(中国放送 ラジオディレクター)

ベトナムの恋歌

雄本俊一 (元文化放送社報部)

2001年4月、ベトナムの音楽家チン・コン・ソンの計報が新聞に載った。享年62。彼の死を悼む朝日新聞の記事に「高齢ながら、気は若くて繊細云々」とあった。書いたのは若い記者さんかな。60歳そこそこで「高齢」はないだろう。それはともかく、197

8年に僕は南ベトナムへ行った。

ある日、人気の高い歌だと聞いていた作詞作曲チン・コン・ソン、歌カンリーのカセットテープを買った。聴いてみると、たまたま僕が行ったサイゴンのキャバレーで、客たちが踊っている背後で鳴っていた曲があった。甘ったるい流行歌だろうと思っていたが、歌詞の意味を通訳から聞いて驚いた。

「私の恋人は・・・」と始まり、どここの戦場で、どんな風に、誰も彼もが死んだ、死んだ、と延々と続いたあげく「大きくなって、耳に馴染んだのは砲弾や地雷の音ばかり、私の両手も唇も今は余分なもの、私は人間の言葉をもう忘れました」と終わる歌なのだ。すごい内容の歌を伴奏にダンスをするものだと思っただけである。

そのカン・リーを文化放送開局30周年記念のイベントに招く交渉で米国の彼女の家(サイゴン陥落直前に海外脱出)まで打ち合わせに行った。それで彼女の夫と親しくなり来日の度に連絡があり、数回会っている。

夫と酒を飲みながら先述のことを話さずねてみた。「あんな悲痛な歌で踊っていたなんて、ひょっとすると僕の錯覚だろうか?」「いや、その通りだったよ。あの時代は」と彼は答えた。

今カン・リーは、世界中に四散しているベトナム人社会を対象にコンサート・ツアーに飛び回っているが、チン・コン・ソンの死は、彼女にとって大変なショックだったにちがいない。彼女の気持ちを手紙で書いてみたいと思いつつ、まだ果たしていない。

生放送時代の「周五郎ドラマ」

高橋 一郎

今年6月〜7月に放送されたNHK金曜時代劇『ゆうれい貸しませす』(演出はエンブラ21の遠藤君と私)の原作が山本周五郎の短編『ゆうれい貸屋』だったので、以前TBSに山本周五郎アワーという30分ドラマ枠があった事を思い出した。

今から42年前の昭和36年(1961年)1月から6月にかけて毎週読み切りで25回、『雨あがる』『その木戸を透って』『地蔵』などの作品が放送された。時間帯は水曜22時30分〜23時で、廻り持ちで何人ものDが演出を担当し、私は専任ADだったから当時の事をよく覚えてる。モノクロ生放送の時代である。

その頃、TBSは水曜にナイター中継を行っており、時折野球が延長戦になると、「周五郎アワー」は押されて放送が遅くなる。15分遅れで放送開始になった時もあり、30分遅れの23時から始まった時もあった。「周五郎アワー」は全編生放送もあったが、前年(1960)の中頃から幾つかのシーンを事前にVTRに収録し、それを生放送のドラマにインサートする形態が流行った頃だったから、このインサートVTR方式が多用されていた。その典型が大山勝美演出の『地蔵』だった。『地蔵』はまずインサートVTRのブロック数が多かったのだが、ノーセットでやりたいと言う大山さんの意向で、その事前の収録に異常な手間がかかったのである。そのためカメラハが終わらないうちに放送時間となってしまった。

6月28日、この日は野球の延長が無く、定時の22時30分に放送が始まった。ノーセットだからカメラは四方八方から地蔵を中心に群衆を囲んで撮る。われわれAD3名(一人は堀川とんこう君だった)は、全員ズラと衣装を付け、群衆を誘導しつつ走り回りながらキューを出した。何しろカメラハも満足にやらずに本番に突入したのだ。スタジオは極度の興奮と混乱に終始終始し、気が付いた時には番組は終わっていた。

数年後、大山さんは近鉄金曜劇場で『地蔵』をリメイクした。その時も私はADだったが、キチンと完成された後年の作品より、生放送の狼藉さに満ちた前作の方が原作の雰囲気をも的確に伝え、また魅力的だったと思えてならない。

- 会員名簿 : 合川 明 青木裕子 赤井朱美 秋田完 新井和子 案業城 格 有馬哲夫 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市橋明子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上欣也 岩澤敏 岩下恒夫 上田千秋 碓井広義 歌田勝彦 宇野 昭 生方惠一 浦田彰 江口展之 遠藤利男 遠藤ふき 太田敬雄 大原れいこ 大山勝美 岡 弘道 岡崎 栄 岡田晋吉 緒方陽一 小川秀夫 沖野藤 萩野慶人 小田昭太郎 加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 片島紀男 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一 河合 肇 川口和久 川口健一 川口幹夫 河崎 勲 川尻順一 川竹和夫 川野楠巳 川平朝清 川邑厚徳 川村正一 岸田 功 北川泰三 北川 信 北出 晃 北村美憲 北村充史 木村栄文 木村成忠 楠美 昌 工藤英博 小出五郎 児玉孝光 後藤多聞 近藤 晋 今野 勉 斎藤伸久 斎藤守慶 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江 正 坂元良江 桜井 均 桜井元雄 迫田朋子 笹川紀久雄 佐々木欽三 佐々木彰 佐藤利明 佐藤 年 沢口真生 澤田隆治 重延 浩 静永純一 渋谷原生 島野功緒 清水 満 下川靖夫 下重曉子 習田 豊 城 菊子 菅野高至 杉澤陽太郎 鈴木昭典 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之 須磨 章 せんぼん よしこ 高尾正克 高島秀之 高橋一郎 高橋啓 高橋 泰 滝 大作 武田光弘 武谷雅博 田澤正稔 只野 哲 田中昭男 田原英二 田原茂行 千葉 勉 露木 茂 鶴橋康夫 土居原 作郎 戸崎春雄 戸田桂太 外崎宏司 土門正夫 中川幸美 中島 僚 中田美知子 中谷英世 中津川 輝夫 長沼士朗 長野克亮 中村克史 中村季惠 中村耕治 中村英美子 難波秀哉 西田善夫 丹羽美之 根津武夫 野崎 茂 野田宏一郎 萩野靖乃 橋口義春 林 勝彦 原田庸之助 原由美子 久野浩平 備前島文夫 一杉丈夫 福田雅子 藤井 潔 藤井卓雄 藤井チズ子 藤代勝博 藤田晋也 藤田道郎 藤久ミネ 星田良子 堀川とんこう 松浦幸一 松尾羊一 松田輝雄 松平定知 松前洋一 松本 明 松本 修 松本国昭 三上 章 水上 毅 水野憲一 満島保夫 三村景一 三村千鶴 宮脇敏雄 明神 正 村上紘一 村上雅通 村上佑二 村木良彦 銘苺栄昌 桃井 章 森川時久 矢島良彰 藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保 山崎 裕 山路家子 山田良明 山田 尚 大和次次 山名光紀 山根基世 山辺麻未 山本恵三 山本隆則 湯浅和憲 横山英治 吉永春子 吉村直樹 吉村 誠 和田智允 和田洋一

(2003-7/20現在)

会報をお読みになった非会員の皆様:会員になりませんか:詳しくは メールアドレス:info@hosojin.com ホーム・ページ :http://www.hosojin.com

編集後記

お詫び訂正の再お詫び訂正。 会員 楠美 昌さんへのお詫びを前会報で記した際に「楠見 昌」とやっちゃいました。 二度も間違えるのはなぜだろう? 雅浩「そりゃお前さん、佐藤愛子の小説「その時がきた」なのだ。人間は年はとりたくない喃」 瓶にさわるからやっつがれ、間違いに おけるデジャヴゥをたどって見ることにした。

(そーいえば悪友の楠見健介なる男は 結局小説はモノにならなかったが)とはるかな文学青年時代をまたたどる。 すると我が過去指向の頭脳は忽ち昭和21年にタイムスリップした...

まだ焼け跡闇市時代である。NHK「放送討論会」の生放送に中学生だった私はつきあっている。中継会場の日比谷公会堂に入場したのである。たしかマル共の伊藤律に社会党右派の平野力三に、そー「楠見」ー農林次官だった。 彼は「隠退蔵物資が〇〇の倉庫にあるぞ!」と叫ぶ会場の質問にこまめにメモをとり、「さっそく調査します」。

あのころは官僚はまだ公僕と言っていた。誠実そうな次官の答弁が印象的だった。つまりクスマー楠見という左脳に眠っていたデジャヴゥ(既視感)が57年振りに作動したのではなからうかと言ったら、雅浩「マガラボケは理屈じゃないのよ」と冷たいのだ。

楠美 昌様、 ほんとに申し訳ありませんでした。(松尾)

本会報の無断転載を お断りします

☆事務局夏季休暇 8月11日(月)〜22日(金)